

論点について

論点とは、意見の対立を生んだり、異論を引き出したりする問題点である。同時に、それは議論すべき焦点となる問題でもある。

たとえば、ある政策が社会的な利益を増大するとしても、それに対して新たな格差が発生するとの批判があった場合は、社会的な利益の増大と新たな格差の調整の問題が論点となる。その調整には、いくつかのタイプがあろう。

第1は、功利主義的な調整である。それによれば、社会的な利益の増大による人々の満足度と発生すると考えられる新たな格差による人々との不満を経済的な尺度で測り、いずれが大きいのかを判断して、政策の採否を決定するのである。あるいは、社会的な利益の増大を図りつつ、新たな格差の発生を抑えるように、政策を修正するのである。

第2は、正義論的な調整（公正・公平の実現）である。基本的人権と呼ばれている人々の自由と権利は何ものにも代え難いものであり、最大限に擁護すべきことは言うまでもない。そのため、社会的な利益の増大が得られるとしても、自由と権利にかかわって（もちろん、それらにかかわることのない社会的政策はない）格差が拡大することは容認できない。格差を解消することができないのであれば、むしろそれを小さくすることを条件に、特定の政策を容認してもよいと考える。したがって、政策は社会的な利益の増大を制限しても、格差の解消に向けて修正すべきなのである。

第3は、共同体主義的な調整である。社会的な利益にしても、公平な正義にしても、これまでの歴史や伝統と無関係に考えることはできないはずである。そもそも社会にしても、自由や権利、正義にしても、それらの概念は歴史と伝統のなかでつくられてきた。それをつくってきた基盤は、美德、あるいは善にある。何が美しく徳のあることなのか、なにが善いことなのかは、これまでの先人が考え、積み重ねてきたのである。その積み重ねを尊重して、それらを明確な基準にしながら特定の政策について判断すべきなのである。

第1は、ミル（John Stuart Mill）やベンサム（Jeremy Bentham）の功利主義の立場である。第2は、ロールズ（John Rawls）を代表とするリベラリズムの立場による。第3は、「白熱教室」として話題になっているサンデル（Michael J. Sandel）の立場がそうである。しかし、いずれの立場が絶対的に正しいとは言えない。したがって、サンデルがやってみせるように、「白熱教室」にならざるを得ないのである。

では、どれもが正しいのか、どれもが間違っているのか、と問われても答えることはできない。どの立場で考えることが正しいかどうかは状況しだいだからである。すなわち、政策を立案しなければならぬ具体的な問題状況に応じて、それぞれに判断すべきではないか。しかも、暫定的な判断に留まるほかないようである。

このような曖昧な、懐疑的な姿勢を維持し、継続して考えることが求められている。したがって、立場の異なる者が互いに積極的に議論すべきなのである。それは、決して専門家だけに要求されることではない。むしろ、専門家とは異なり、専門性を有しないことにより多様な領域を横断して考えるべきであり、考えることが可能な一般市民にこそ、求められるのではないか。

このように考えてくると、政策立案型パブリック・ディベートへと導かれよう。また、対戦チームが互いを尊重して質疑と意見交換を行い、論点を明示して政策を見直すことが望ましいのではないか。